分科会E　記憶のエクリチュール

総括

菅　聡子

本分科会では、自伝・日記・回想といった個人の「記憶」を読み解く行為を通して、「歴史」がいかに語られ、再編成されるのか、その端緒をさぐることを企図した。三人の発表者の方々には、それぞれの関心の範囲で自由にご発表をいただくこととし、事前に相互の意見交換等を行う場は設けなかったが、結果として「記憶」をめぐる共通の問題点・キーワードが見出されたのは興味深いことであった。

佐藤英子氏による「中世の貴族と日記－『玉葉』を中心に－」は、平安末期から鎌倉初期に活躍した公家九条兼実の日記『玉葉』をとりあげ、「情報」の伝達をめぐってさまざまな角度から考察を加えたものである。会場からの質問にもあったように、家記の性格の変化が、何によってもたらされたのか－時代の要請なのか、あるいは兼実という個性の問題なのか－、という観点は、日記の書き手の自意識の問題へ翻訳することができよう。同様の関心は、竹内栄美子氏による「中野重治の日記」においても導かれた。自己告白としてではなく、プロレタリア文化運動解体過程のあとづけと検証という意義を持つ中野の『敗戦前日記』において、「断片」の様相を見せるその記事の空隙を埋める作業は、果たして後世の読者によってのみなされるのであろうか。読者としての中野は存在しないのだろうか。自己を語ると同時に、自らそれを「読む」という行為を想定すると、日記あるいは自伝といった文学ジャンルをめぐる複雑な読書空間の生成が予想される。自らを語る、という行為そのものに、歴史的な視点からのアプローチを試みたのはヴォルフガング・シャモニ氏による「回想から自伝へ－日本十七世紀の場合－」である。仁木寿斎『寿斎記』（1611）から田捨女の出家後の自伝（1698）までの十二の記録をクロニクルにたどる考察の過程は、参加者にジャンルの生成への問題意識を喚起し、やはり、会場からは書き手の自意識をめぐる問いかけがなされた。

分科会での発表ならびにそれをめぐる質疑応答を通じて前景化されたのは、書き手の自己認識の問題である。それが広く「歴史」を語る行為へと拡大されたとき、自己認識の主体は誰になるのか。問題の展開を喚起する討議がなされたと思う。